

修士論文要旨

「系胤譜考」の研究

- 盛岡藩成立期の家臣団を中心に -

地域文化リノベーション

g 0 2 1 8 0 0 4

劔持 祐之介

今回、取り扱う系図集「系胤譜考」は、盛岡藩の命により伊藤祐清・円子記が編纂した盛岡藩家臣団の系図集である。文久元年（1886）に『参考諸家系図』を著した星川正甫は、寛保元年（1741）年にまとめられてから約120年が経過している「系胤譜考」を参考にしている。このことから、盛岡藩家臣団の形成は「系胤譜考」編纂時の頃から基本ができていたと考えられている。したがって盛岡藩家臣団の形成を知るには、「系胤譜考」が基本となる。

主にこの「系胤譜考」の記事を引用し、盛岡藩成立時期の盛岡藩家臣団について家禄・本領に着目しつつ検討していきたい。

平泉藤原氏が源頼朝による唯一の遠征であった文治5年奥州合戦に敗れ、その支配が鎌倉幕府に移った。鎌倉幕府による奥州統治は奥州総奉行や平泉藤原氏時代の郡司・荘司・保司が追放され、関東御家人による地頭として入ってきた。北奥羽に注目し、例を挙げると津軽諸郡は宇佐美氏、奥六郡の内、岩手郡は工藤氏、志和郡は足利氏、和賀・稗貫郡は中条氏に給与されたらしい。その後、鎌倉時代の半ばが過ぎる頃には、大半が北条氏の所領となった。鎌倉幕府滅亡後は、津軽・糠部方面の北条氏所領がすべて没収され、南北朝動乱期において安藤氏、南部氏、工藤氏などは勢力争いを行うこととなった。この中で南部氏は、鎌倉期以来牧場地帯の糠部を領していた。永享4年（1432）に一三湊安藤氏を破り夷ヶ島に没落した後、津軽にも進出した。ついで大永元年（1512）志和郡の和賀氏、天文9年（1540）に、岩手郡滴石城の戸沢氏を破った。岩手・志和郡は天正16年（1588）に斯波氏を破り攻略。天正18年（1590）の奥羽仕置で、豊臣政権より「南部内七郡」（糠部・久慈、鹿角、志波・岩手、閉伊・遠野）を安堵された。されに天正19年（1591）の奥州再仕置（九戸一揆鎮圧）後に、和賀・稗貫を加増された。このように南部氏は、南北朝期から戦国期において勢力を拡大していくこととなった。（入間田宣夫「北の平泉」（入間田宣夫、豊見山和行編『北の平泉、南の琉球』、中央公論社、2002年8月、菅野文夫「5章幕府政治と動乱」（細井計他『岩手県の歴史』山川出版社、1999年8月、入間田宣夫「鎌倉幕府と奥羽両国」（小林清治、大石直正編『中世奥羽の世界』1978年4月、小林清治「大名権力の形成」（小林清治、大石直正編『中世奥羽の世界』1978年4月）

1章では、盛岡藩成立時期の盛岡藩家臣団の編成を知る手掛かりとなる「系胤譜考」の構成や、記載の形式を述べ、編者である伊藤祐清・円子記を「系胤譜考」、『参考諸家系図』

で比較し、編者の人物や家禄を明らかにした。また「系胤譜考」の分析視角として盛岡藩形成過程の概観を細井計他『岩手県の歴史』から戦国から近世初期までの概要をまとめ、問題意識を持った。

2章では、光行から晴政期までに編入された家臣団の考察を行った。晴政期の家臣団は、三戸南部氏本来の家臣団と考えられ、「信直記」から「門葉・一家・家ノ子・四天の士」をそれぞれ取り上げ、また三戸南部一族・上記以外の家臣を分類した。門葉は、盛岡藩成立時期である利直期における家禄とその後の変遷比較し、門葉であっても家禄が大きく下がっていることが分かった。

3章では、信直期に家臣団に編入された家臣団の考察を行った。信直期に召し抱えられたとされる家は本家が多く、高禄な家が多い特徴がある。南部氏の本領である糠部の武士、南部氏の支配領域拡大過程で家臣化したもの（鹿角・岩手・比内・閉伊・志波・稗貫・和賀・遠野・江刺）、他大名との関係で家臣化したもの、牢人の召し抱え、南部氏一族に分け検討した。南部氏の支配領域が拡大する過程で家臣化した武士の全21家は、南部氏の本領である糠部武士ほどではないが盛岡藩家臣団の中でも比較的高禄であることが分かった。

4章では、利直期に編入された家臣団の考察を行った。利直期に召し抱えられたとされる家は信直期よりも多いが、分家も多くなり、家禄は小さくなったという特徴がある。これらの家を3章同様に分け検討した。牢人召し抱えでは、上野氏が栗山大膳が預人として福岡藩から盛岡藩に下向したことに供したように、幕藩体制成立を背景に、他藩から牢人が来ることが利直期の特徴として分かった。

この修了論文を通じ、盛岡藩成立過程の盛岡藩家臣団の形成過程や、家禄の変遷を整理し明らかにした。盛岡藩家臣団は、まだまだ研究の余地が多くあるため、重直期以降の変遷や本領、知行地、職業に着目することを今後の課題としていきたい。